

日本古生物学会第156回例会シンポジウム 「古生物学のアウトリーチ — 博物館での取り組みを例にして —」 総合討論報告

General discussion of the symposium 「Outreach of paleontology in museum activities」

シンポジウム各講演終了後、講演者を交え、「博物館を通じたアウトリーチ」および「大学・研究所・学会を通じたアウトリーチ」という二つのテーマで総合討論が行われた。「大学・研究所・学会を通じたアウトリーチ」については時間の関係から十分に議論が行われたかは疑問であるが、鍵となる話題を中心に以下にまとめた。

博物館を通じたアウトリーチ

主に展示（巡回展）、普及教育、出版学校との連携について議論が進められた。学校との連携については「大学・研究所・学会を通じたアウトリーチ」でも活発に議論され、多くが重複するため、次の「大学・研究所・学会を通じたアウトリーチ」の項でまとめて述べることにする。

展示（巡回展）

多くの博物館では常設展示の他に年数回の特別展または企画展と呼ばれる展示会を行っている。しかしながら、近年の国や地方自治体の財政赤字を背景に、博物館に対しても大幅な予算削減が行われ、各館独自の特別展・企画展は規模の縮小や回数の減少などを余儀なくされている。また、学芸員がアイデアを出し、一つの展示会開催には莫大な時間と労力を費やすにもかかわらず、自館のみで完結してしまい、非効率性を感じざるを得ない。そのため、複数の博物館に特別展・企画展を回す巡回展はたいへん有益であると思われる。

これまでも核となる博物館の呼びかけによって、巡回展が行われてきた。ただ、巡回展の規模が大きくなればなるほど、その問題点もある。国立科学博物館を中心に行われた「恐竜博2005」では、規模が大きくなることによってスポンサーが必要となり、その結果、採算性を気にしなくてはならず、集客力や展示スペースの点から開催場所が大都市周辺の地域に限定された。また、大都市周辺であっても、隣接地域、同ブロックであると、集客において競合が見られることから、開催場所の調整が必要となる。

巡回展開催にも多くの問題点があるものの、展示会の効率性や広く一般の人々に資料を見てもらう意味でも、今後、巡回展を企画し、推進していくことが必要と思われる。そのためには、博物館や学芸員同士が密接に連絡を取り合い、各館が所蔵している資料コレクションの情報を共有し、ネットワークの構築をしていくことが強く望まれる。

普及教育

展示においては、資料借用や巡回展を通し博物館同士の連携が少ないながらも行われているが、普及教育行事に関しては博物館間の連携がほとんどなく、他館の普及行事の状況を把握していないことが多い。各館が行っている普及行事を広く知り、手本となる行事がある場合は、それを参考にし、積極的にノウハウを取り入れていく必要がある。

従来博物館で行われている普及行事の多くは、「楽しむ・知る・体験する」という段階でとどまっていることが多く、その次の段階へ進めないことが多い。たとえば、多くの博物館で行われている「化石のレプリカづくり」を例に挙げると、参加者がレプリカ作製だけにとどまってしまう、知的好奇心を促すところまで至っていないと感じることが多い。反面、子どもたちがレプリカをつくる楽しさがきっかけとなり、博物館や古生物学と関わりを持ってもらう意味で非常にプラス面もある。今後は他館の普及行事を参考にしながらも、参加者の主体的な学びを促すような、各館のオリジナルの教育プログラムを開発することが必要である。

出版

一般向けに出版物を作成することは、古生物学を広く知ってもらう上で非常に有効な手段の一つである。多くの博物館においては、ニュースや冊子等を年数回発行し、また特別展・企画展を開催した際は、図録・解説書を作成している。しかし、作成した図録や解説書は展示会を開催した博物館でのみでしか取り扱われず、一般にはなかなか入手することが困難である。その点、図録・解説書を一般書籍として出版すれば、より一層の普及効果が期待できる。千葉県立中央博物館では、過去に特別展・企画展の図録・解説書を一般書籍として出版しており、このような前例を参考にしてより努力していく必要がある。また、特別展・企画展以外でも普及向け出版物を積極的に発行していく必要がある。国立科学博物館では独立行政法人化にともなって、叢書というシリーズを一般書籍として出版している。

大学・研究所・学会を通じたアウトリーチ

学校との連携

学校との連携については、さまざまな学会で多くのシンポジウム等が行われているが、非常に難しい問題を含んで

いる。学校との連携を進める上で、研究者と教師との結びつきが必要不可欠であるが、実際のところ現場の教師は学習指導要領で縛られ、研究者との連携による自由な授業や行事を進めることができないというのが実状である。今後、学習指導要領に博学連携や高大連携を推進する文面が盛り込まれることを期待するが、日常的に研究者側が地域との信頼をつくり、人材を発掘し、そこからネットワークを広げ、人材を育成する努力も必要である。

また、海外の学会では地域の中学・高校の教師に対して、最新の研究成果を発表するレクチャースクールを行っ

ている。日本古生物学会においても学会開催中に教師を対象としたレクチャースクールのような取り組みを行い、人材の発掘、育成に力を注ぐ必要がある。

以上の議論から、人材の発掘育成やネットワークの構築、情報の共有など、共通のキーワードが見えてくる。このような議論が絵に描いた餅にならないよう、可能な範囲で実現していることが重要である。

辻野泰之（徳島県立博物館）

